詩

銀婚式

九分会(三川) 平田 光男

妻が
「生活が苦しい」と
アルバイトにいく
そして今は
家計の柱になって
おれの立場もわびしい

妻はなぜか
湯呑み茶碗に
必ず口紅をつけて出勤する
今日もそうだ

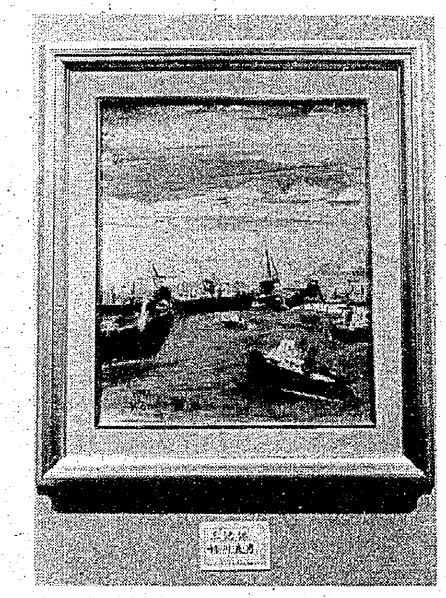
「今日は銀婚式のはず」という
おれは外に出て
石ころを蹴った

妻と二人しか知らない
多くのできごと
それを知らぬ子供たちも
銀婚式は知っている
その子供たちには
石ころを蹴らせたくない

姉川さんが出展

有明地域総合美術展に

個展も準備中



四月二十三日から二十八日まで、オームタ・ガーデンホテル地階ギャラリー（大牟田市旭町）で開かれた第一回有明地域総合美術展に、姉川良男さん（十八分会・港務）が八号の油絵『港』を出展されました。

この美術展は有明海沿岸の大牟田、柳川、三橋、大和、山川、瀬高、高田、荒尾の三市五町の美術作家の作品を集めて催されたもので、洋画、日本画、書道、染色、陶芸、写真などの六部門、およそ二百点が展示されました。

いままで大牟田、荒尾などでそれぞれ独立した美術展などが行なわれていますが、有明地区の広い規模では初めてで注目されました。

姉川さんは六月に定年退職を迎えますが、この機会に長い画歴にひと区切りつける意味で今年中に個展を開くことを計画しており、制作に励んでいます。なお、姉川さんは大牟田総合美術展の審査員をつとめています。

時のことば

サラ金規制法案

刑事罰を伴う上限金利年一〇九・五%を、三年間は七三%に、その後五四・七五%に引き下げ、最終的に約四〇%にするというもの。しかし、業者の大手は金利七〇%前後で貸し出し、大手サラ金の金利は四～五〇%程度であることから、法案は高金利を維持、容認する内容。しかも最終金利四〇%も施行期日を定めていない。現在利息制限法の上限金利（最高年二〇%）を超過して払った利息分は取り戻せることになっているが、法案はこの返還請求の道も閉ざしており、業者の強引な取り立ての規制もあいまいなものとなっている。

魅力的なまち

しんどい旅だったが

尼崎 北川 珪子

先日は突然おじゃまして、囚人墓地はじめ三池炭鉱のあちこちを案内していただいた者です。その節はほんとうにありがとうございました。選挙期間中のお忙しい時だったことをとても気にしています。

あのあと笹林公園へ行き『三池炭山創業碑』を見ました。大牟田はまちの中に働く者の歴史が息づいていて決して観光地のようではないけれども魅力的でした。まち全体がたたかいの歴史なのでしょうか……。

写真はスライドにして子供たちに見せると思います。そしてたぶん案内してくださった人のことも話すだろうと思います。

九州の言葉もよかったです。

本、新聞、それから必読文献というのも読んでみようと思っています。

生きている炭鉱に行くということは、そこには労働者の生活とたたかいがあるからで、私も労働者の一人としてかえっていくべき自分の課題が意識されてしんどい旅行でした。

たいへんお世話になり、ありがとうございました。

×

お便りをいただいた北川さんは、兵庫県尼崎市西本町一の五〇にお住いで、学校の先生です。ありがとうございました。ともにがんばりましょう。

なお、お便りは芳川組織部長宛におくられたものです。

女坑夫の語り聞きから

その四

納屋下宿人

十六分会(本所) 武松 輝男

「オイ、お前ンところに、二人バ下宿させてくれ。よいな」

納屋世話方から、強い調子で、下宿人を頼むことを請われると、イヤとは言えなかった。

「もし、ああた、イヤと言うてみなはりまっせ。そん時は、そうか。イヤか。できんか。そんならよか。と言わっしゃる。

そこまではよか。しかしそんあとができんデス。

お前げんオヤジは出勤が悪か。子供バ泣かせすぎる。お前ンとこん買物は多すぎる。酒バ飲みすぎよる。掃除が悪か。

それこそ、重箱の隅バほじくるごと、細かこつまで文句バつけられる。そして、そんあげく、そげなふうなら、納屋住いには向いとらんテ言うて、納屋バ出らんといかんごと言われるデス。

それで、六畳と三畳の二間しかなか納屋に下宿させるとバ、ことわれんとデス」

炭坑納屋は、六畳か四畳半と、三畳か二畳の二間に、土間がある。それだけの広さであった。その狭い納屋に、坑夫を二人も下宿させなければならなかったのだ。

「そん間はですナ、太モモバ紐できつう結えつけたような生活バしたもんデス」

納屋住まいの、あの狭い部屋で、大の大人が、鼻を突き合わせて生活する。だから夫婦の私生活は、そのほとんどを切り捨ててしまわなければならなかった。体の芯が焼けるときは、襖のかげで泣いた。

下宿坑夫たちは、疲れたと言っては酒を飲み、嬉しい、悲しいと言っては酒を飲んだ。そして、その酒を飲んだ酔眼で舐めるように女を見据えた。

酔眼が、腰のふくらみに止められたときは、身の縮む思いがしたものであった。

坑内で、褌姿という、いわば素裸同然の格好をしているのであるから、酔眼で見据えられても、どうという感情は生まれることもないはずであったが、腰巻きをし、留袖を着ると、不思議と羞恥が湧いた。それで、

「家ン中で歩くときは、オナゴは腰と尻が振れるバッテン、その腰と尻が振れんごと歩いたもんデス」

そのように、身を固くし体を縮めて生活した。そのたびに、狭い部屋に下宿人バ割り当てんでもよさそうなものだ、と愚痴った。

坑夫募集人が連れてきた坑夫、その坑夫たちが、合宿大納屋に入りきらないと、その余った坑夫が

納屋下宿にまわされた。その下宿坑夫の下宿代は、食費だけであった。その食費のうち、米は現物を支給された。あとは、わずかな副食費だけであった。

「そりゃあ、飯バ食わすっともおおごとでした。食べすぎると、米が足らん。そのヤリクリもしなきゃならん。それに朝は弁当バ四つも五つも詰めなきゃならん。歌がありますタイ。

詰めた詰めたヨ弁当箱五つ
金になるのはただ一つ

オナゴはですナ。わが家の暮らしにゃ、なんの足しにもならん弁当バ詰めてですナア。アアー」

（カットも筆者）

釣りキチ余談

天草小ケ瀬の巻 (一)

第二十五回

石田 鈍竿

十時頃だったろうか、俺が二キロ弱のクロを釣り上げてから、S君が海鯉といわれる、真紅の色をしたヒメジを釣り、今からが本番ぞ、と目の色を変えている頃から、少しずつ空模様がおかしくなり波が立ってきた。

少しぐらいの波なら、かえって好条件ばい、といっているうちに風が強くなり、波が高くなってきた。見るみるうちに大波は、岩をも砕けとばかり磯に打ちつけ、潮しぶきでずぶ濡れになるほどの荒れ模様になってきた。

ついに釣りを断念し納竿。

安全個所に荷を上げ避難していると、瀬の反対側で釣っていた釣り人たちが、ぞくぞくと集まり出した。十数人はいただろう。『早よう迎え船が来ンと、帰られんごつなるぞ……』誰かがいった言葉に、みんなの顔色も変わり興奮気味である。

そんな中で荒れ狂う海をにらみつけていたベテラン風の釣り人が、ヤッケのフードをすっぽりとかぶり、俺の腕をしっかりと握っていたH君の顔をのぞき込み、『お嬢ちゃん心配せんでよかよ。お父さんにしっかりつかまっとかんね。船がすぐ迎えに来るけんね』と、H君の肩をたたいてやさしくいった。

紅顔可憐、当時十七歳の美少年H君はポカーンとして俺の顔を見ていたが、女と見違えらたことで顔を真っ赤にして怒る。俺は吹き出すわけにはいかず、笑いをかみ殺してS君と顔を見合せるのが精一杯ぱいだった。

やがて迎え船が来た。全速力で波を切り、接岸したと思ったらそのまま三十メートルは波に流され、渡船のチャンスは一秒もない。飛び乗りに失敗すれば波にのまれ岩にたたきつけられて一巻の終りである。

船を操つる水口船頭の顔が緊張で引きつっているのが見える。船が全速力で突っ込んで来た。

潮しぶきを全身にかぶりながら、磯先の岩にしがみついてチャンスをうかがっていたS君が、タイミングよく飛び乗りに成功した。『ヨーシ』。義足の俺には、万が一にも可能性はないので、あきらめるほかはない。他に三人が飛び乗ったが、これ以上は危険だと判断した船頭は、そのままUターンして、海上保安部に救助連絡した。

一時間ぐらいたったろうか、ますます怒り狂う波を突っ切って、大型救助船が姿を見せた。ドーッと歓声が上がった。瀬に近づいた救助船は、短時間のうちに三方にロープを張り、船を安定させて接岸した。

全員乗船完了。一ぺんに力が抜けた感じである。

安心感から、みんなの顔に赤みがさしたのは、港に入って煙草を深く吸い込み、吐き出してからであった。

翌日の新聞には、島根やその他の地方で、死者五人、行方不明一人という遭難者が出て、ヘリコプターで救助されたという記事がのっていた。

十一月からの季節風は恐ろしい。この時の経験は今も、今からも釣りをする限り忘れないだろう。いや、忘れてはならないのだ。(昭和五十一年の釣行から)